

# 推薦の言葉

新しい知見，画期的な新薬の登場，そしてそれらに伴うパラダイムシフト。そう，僕らの勉強にはきりが無い。否，そういった場面だけではないし，薬剤師だけに限った話でもない。そもそも勉強とは，物事をよく知るということは，そういうものなのだ。

“物事をよく知るためには細部を知らなければならない。そして細部はほとんど無限だから，われわれの知識は常に皮相で不完全なのである”

——ラ・ロシュフコー（二宮フサ・訳）：ラ・ロシュフコー箴言集，岩波文庫，p39, 1989

勉強はどれだけ取り組んでもきりが無いし，完璧を目指そうにも細部は無限だ。そして，SNSのタイムラインにあふれる情報は，そういう「勉強のきりのなさ」を可視化し，際限なく僕らに迫ってくる。「ほら，薬剤師なんだからもっと勉強しなさい」と。

僕らはどのようにこの「勉強のきりのなさ」に対応していけばいいのだろうか。哲学者の千葉雅也氏はその著書『勉強の哲学 来たるべきバカのために』にて，“勉強を有限化する”ことを推奨している。では具体的に，勉強をどのように有限化すればよいのだろうか。その回答の一つこそ，本書の著者が取り組み続けている“薬の比較”なのだと思う。

薬の比較を行うときに大事なこと，それはまず「薬の特徴を一言で言い表す」こと。次に「類似薬の違いを簡潔に表現する」ことだろう。それらは服薬指導の場においても，患者の理解を容易にする。つまり，効果的な服薬指導につながるわけだ。

そして最後に，勉強をするうえでもっとも大切なこと，それは楽しむこと。つまり，勉強を有限化するには，あなたにとって楽しいと感じる手法を採用したほうがいい，ということだ。この点において，本書のコンセプトはたいへん魅力的で，本書を参考に自分で本書の続きを作ってみることを提案したい。

まずは本書を手にして，薬の比較の考え方を学ぼう。薬理や動態をどう表現し，どう用いているのか。薬理・動態といった薬学の王道を，比較という思考の王道で学んでいくのだ。これが楽しくないわけがない。本書で学び，本書を踏み台にし，薬理・動態の知識が処方提案や服薬指導に滲み出る。そんな薬剤師が増えていくことを期待して，本書の推薦の言葉としたい。

2026年6月

合同会社ファーマエディタ  
熊本大学薬学部臨床教授  
山本雄一郎